



(社)日本建築家協会 沖縄支部  
藤元 節男 樹国 建OB

50年ぶりの再訪、宮島厳島神社



宮島は古来より神の島、厳島神社は推古天皇元年(593)の創建。その

主柱：樹齢600年のクスノキ自然木、全高：16m(奈良大仏と同高)

鳥居には、上下二段の横架材。上段をへ鳥木に笠木、下段をへ貫

後の平清盛の手による海上社殿群は世界遺産に指定され、今では多くの外国人が訪れています。先般、ここで中学時代の還暦同窓会があり50年振り島に渡りました。これを機会に、小学校遠足以来の素朴な疑問が一つ解きました。

「海上の大鳥居は木造。満潮時、何故浮かないの。シケの大波に堪えて動かないの」

当時、これに大人は誰も答えてくれなかったのです。(今時の子供達なら、さしずめネット検索で簡単に答えを得るでしょう)なので、今回は少し勉強しての再訪です。海上大鳥居は、明神・両部鳥居造り(左右の堅柱前後に添柱)と呼ばれています。干潮時には遠浅地面にその柱脚が現れ、足元は松杭による強化地盤。木組は、ここにただ置いてあるだけです。

千四百年の時空を越え、凛としたその美しい佇まい



社殿群を取巻く門前町一裏通りの佇まい

と呼びます。隠された秘密はこの島木にありました。ここではこれが無垢材ではなく、実は内部空洞の箱作り。空洞部には大人頭大の玉石がギッシリ詰め込まれ、この重石の踏ん張り度で鳥居は浮力と波に拮抗しています。なるほど、判れば素直に納得。これを成し得たのは無名の番匠(大工)達。社殿と鳥居は、何気に凛として海上に起立しています。

その美しいさま・佇まいは、ひとつの奇跡です。西洋での奇跡、ガウディーの大聖堂サグラダ・ファミリアの尖塔群。この構造に隠された「鎖の逆垂線」の知識はあっても、「瀬戸の海に浮かぶ番匠の知恵」に思い及ばなかった私は、ここで恥じることとなります。今回は社殿周辺の門前町をゆっくりと散策出来ましたので、もうひとつ大事な発見がありました。創建当時の美しい佇まいは何故、千四百年の時空を越え今も存続しているのか、その訳です。宮島全体は忌事禁じた神域。この島内での規範と人々の暮らし、静かに脈々と受け継がれてきた誇りと尊敬。島外の我々誰もが持つ、このことへの畏敬の念。世界遺産の評価もここにあります。世界を旅して、美しい建ても、街並みに接する度に私は、何時でも何処でもこれらの背景に、否応無く気づかされるのです。(※掲載写真は著者提供)